

小田原史談

第 135 号
発行所 小田原史談会
小田原市南町 2-3-21

北条氏の三つ鱗紋

今の三鱗形の紋是也。(後略)

今年の干支は巳である。巳は蛇に通じ、蛇は鱗を連想する。鱗の家紋は三つ鱗すなわち北条氏の家紋である。

北条氏が家紋として専用したため有名になったともいえるが、その由縁については、『太平記』に次のように記されている。

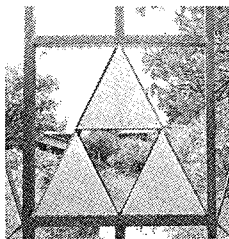
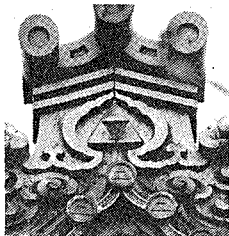
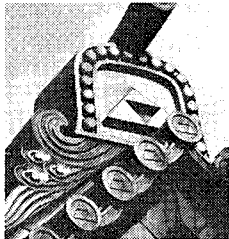
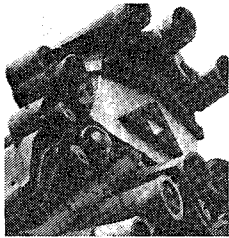
(前略) 昔鎌倉草創の始、北條の四郎時政頼嶋に参籠して、子孫の繁昌を祈りけり。三七日に当りける夜、赤き袴に柳裏の衣著たる女房の、端厳美麗なるが、忽然として時政が前に来て告げて曰、「汝が前

建長寺山門鬼瓦

円覚寺本堂鬼瓦

宝戒寺本堂鬼瓦

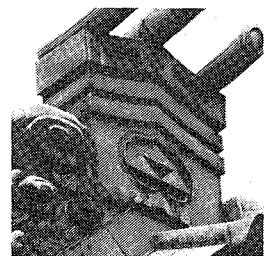
宝戒寺山門扉



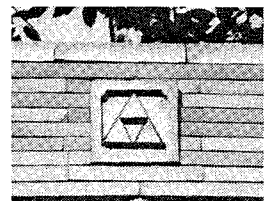
生は箱根法師也。六十六部の法華經を書き写して、六十六箇国の靈地に、奉納したりし善根に依て、再び此の土に生る事を得たり。去ば子孫永く日本の主と成て榮花に可誇。但其争動違ふ所あらば、七代を不可過。吾所言不審あらば、国々に納めし所の靈地を見よ」と云捨てて帰り給ふ。其の姿を見れば、さしも厳しかりつる女房、忽に伏長二十丈計の大蛇と成て、海中に入りけり。其の跡を見に、大いなる鱗を三つ落せり。時政所願成就しぬと喜びて、則ち彼の鱗を取て、旗の紋にぞ押したりける。

一方、鎌倉では、北条氏は二等辺三角形で、小田原北条氏は正三角形ではないのか、という見方が多い。事実、それを裏付けるかのように、小田原では、鎌倉・小田原の両北条氏の縁の区別なく、正三角形のものを採用している寺院が二、三見受けられる。一方、建長寺、円覚寺では共に、北条氏の紋は、二等辺三角形形であると、確信を以て答える。また、小田原北条氏の後裔といわれる河内狭山の北条氏の家紋も二等辺三角形のものを採用しており、北条氏の傍流はいざ知らず、鎌倉北条氏の二等辺三角形の三つ鱗紋を小田原北条氏は、氏と共に踏襲したのではないかと思われるのが、各所を調査しての感触である。

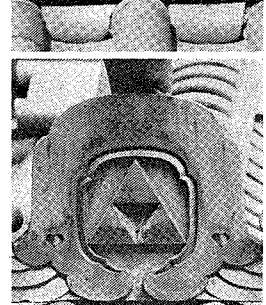
(和田 登・岡部忠夫調査)



早雲寺本堂鬼瓦



早雲寺山門棟瓦



香林寺山門降棟瓦

少年の頃の思い出

大正始めのお濠端界限

相澤 栄一

私の家の側の城址が御用邸になつたのが明治三十四年でした。

私が四、五歳の頃は、まだ濠に沿った道側の水際は、雑草に被われた土手でした。三の丸の道をもそのまゝ使つたので当時としては道巾が広がった。車といへば馬力、荷車、人力車、自転車

であつたが、本通りでなかった故、車も余り通らず人通りも少なかったので、道の半分は草っ原となつていました。其処は、鐘撞堂から御用所裏の土塁と共に私たちの格好な遊場となつて

いました。私の父が御用所の工場で造つた大きなシートの干し場にも使つたりしていました。

私の家から大手門までの家並は、当時十五軒で、大手の門番を勤める藩士たちの小さな住居でした。その頃旧士族として昔から居られたのは隣の太田さんだけでした。

私の家の裏通りの路地を境に北側、御用所境までの間は、家老格千石の大久保雅業介の広い屋敷跡であつたようですが、其処に明治四十年から大正十二年九月の関東大震災で崩壊、焼失

するまで、町立小田原高等女学校があつたのでした。

女学校の隣、御用所の空地は、昔から養蚕場と言はれ、桑畑が広がっていました。そのお濠端よりには、明治の新興宗教、天理教の大部年月のたつた黒ずんだ神殿が立っていました。

私の家の前の検察庁、警察署、工芸指導所、消防署、までが当時、小田原尋常高等第二小学校で、女子のみの学校でした。

お濠端から東の土塁まで、南側から運動場で、テニス・コート、三枚を持っていました。北側に二階建の長い校舎、二棟がありました。私が小学校五年生

から関東大震災の起つた中学三年生までテニスをやって居つたのも、このコートでした。明治、大正期の小田原中庭球部の卒業生たちが大学生として、又、実業人として、毎日汗を流しながら腕を鍛へあげたのも又、このコートでした。このコートを

処点としていた、小田原庭球クラブが県内でも強チームとして名声が高かつたので、此処で県下の強豪たちの試合がよく行は

れました。その傳統が脈々と今日迄、小田原高校や城内高校に流れておるようです。小田原地方のテニス、発祥の地と言つても過言ではないでせう。

関東大震災で全校舎が一瞬の間に土煙をあげて倒壊しました。

その時、弟が校庭で遊んでおりましたので、私は父と共に安否を気遣いながら余震の来る中を倒壊した校舎の間をよじ登つて校庭に出ました。弟たちはコートの真ん中で失心したように、うずくまっていました。

大震災後この第二小学校は高等女学校と共に城址に新築され、此処には木造二階建、モルタル造りの近代的な小田原市役所の新庁舎が立つたのでした。第二

小学校の隣から三の丸の東土塁までが明治期に立つた裁判所でした。その土塁の老松の間に、これも幕末頃からあつたのでせう、丹波栗の老木が二本ありました。爽りの秋が訪れると私

たちは競つて早朝起きて土塁の草むらに落ちた、褐色に光る栗を、うの目、たかの目、で探したのです。この第二小学校と裁判所が城代、千五百石の杉浦平太

夫の屋敷跡でした。杉浦さんは、この頃には今の東映の先隣の方に広い屋敷を構えていました。鐘撞堂から土塁の裏側に沿つて御用所よりお濠端に通ずる、今でもある路地がありました。

その路地を入つた左側に桑原と言う剣道の師範の家があつて、当時古武士を思わせる剣師が道場を教へていました。その上前の土塁の外側に明治期の建物らしい、文明開化の香いのする、ペンキ塗、二階建の町役場があつたのでした。桑原の隣に町役場から塵芥の集荷、処理を請負つ

ていた、広い敷地の杉山衛生社、その北隣が川添さん。その先が私の遊び友達にいた、渡辺、牧野の両家。牧野の角を左に曲つた先の右よりに千野という小学校の先生上りで腰の少々曲つた老人がいて、私が小学校二、三年生の頃宅稽古に通つた家でした。老夫婦と未婚の一人息子とで、

庭で取つた二羽の鶯がいつも美しい声で鳴いていました。その隣が榎島さんで第一小学校の先生でした。一軒おいて隣が娘

さんが第二小学校に勤められていた近藤さん。次の家が後年一人息子が中学で私と同級生となつた辻本さん。武家の長男でした

が明治になって塗師屋に弟子入りして塗師屋になった。小柄の人の良い杉崎さんがその隣でした。お濠端の角が郡役所の書記をされていた藤沢さん。その反対の角が大学を出たが頭がおかしくなつて、変つた生活をして

いた村山さんでした。この御用所の旧武家屋敷も、小田原の各地の旧武家屋敷、同様に杉の生

垣で囲まれた、葉葺き屋根の家でした。

御用所の北側の水路を境に、三の丸の北の土塁より幸田口までの間の広い屋敷が家老格、千四百五十石の山本内蔵の家でしたが、当時は東京浅草の鼻緒問屋、小澤家の別荘になっていて

杉の高い塀で囲まれていました。この幸田口の土塁の老松の側に、實が漢方薬の薬湯に使はれている「ごし」の老木や「なつめ」の木がありました。私は仲間たちと、それ等の木によじ登つて、

「なつめ」の実を取つて食べた、小さな褐色の実が殻からこぼれるように実つた「ごし」の小枝を折つて家に持ち帰つたりしました。その土塁の「なつめ」

の木から下を見ると幸田口から下幸田へ行く道沿いの外濠の稲田が黄金色に実つて美しかった。



お濠端

年頭ごあいさし

会長 相澤 栄 一

旧年中は会員の皆様方より御支援、御協力を賜り誠に有難う御座いました。本年も又、皆様の御協力と役員の方々の御指導を頂いて、皆様の史談会を一層発展させて参りたいと存じます。何卒御協力御指導の程を御願ひ致します。会員の皆様の御多幸を心から御祈り致します。

人心新歳月

春意旧乾坤 真山民(宋)

新しき年を迎えて人の心おのずから新し すでに旧き大地に春の息吹ゆらめけり



高田掬泉画

第二小学校の南隣、お濠端から東の土塁までの広い屋敷が老格、千石の大久保弥六郎の住居で、今もその子孫の方々が住んで居られます。明治三十九年から関東大震災まで、大久保家の北、東よりの地所を借りて、新名裁縫女学校が開校されました。その大久保さんの南の隅に偶屋敷と言はれていた数軒の武家屋敷があったようでしたが其頃は高橋さんが一軒だけ居られました。杉の生垣に囲まれた、薬晝屋根の家でした。

御用邸に宮様がお出になる日は朝早くから砂運び用の荷車が何十台もの砂を海岸から運んで、大手口から御用邸の門前までの道路に巾三メートル位に引いたのです。宮様方は東京から国府津まで列車で、国府津から幸町まで電車でそれから歩かれるか、人力車かでした。あの黒く光った皇族型の自動車で東京からお出になったのは大分後になっての事でした。宮様の御一行の歩かれる列の先頭に立たれた郡長さんの被った私達には物珍しいシルクハットが春の陽を浴びて一層光っていました。女の方々の文明開化を象徴するような洋装に目を見張りました。殿下が前を通られる頃私たちは日の丸の旗を片手に振って、最敬礼をいたしましたのでした。

明神さんの冬祭り、一月十五日の寒い夜でした。御用邸におられる高松の宮殿下へ奉祝のため、お祭に出た町内の山車がお濠端に集りました。数台の山車に飾られた数知れぬ提灯がローソクの炎で黄金色に光って、街灯、一つない暗いお濠端を明るく照しました。競って打つ囃太鼓のリズムカルな音が静寂な城址にこだまして、美しい夜祭を繰広げていました。隅櫓のある高い石垣の上の老松の間で、この夜景を眺められて居られた殿下が提灯を高く掲げてお挨拶をなされました。

私が曾って訪れた弘前城にも、又松本城にも何処の城址にも必ずと言ってよい位、濠の一部が蓮池になっていました。小田原城でも例外ではなく、藩政時代から昭和四十年代頃までは城の正面、三の丸から二の丸に行く道の濠の左側は全部蓮池でした。右側は菱が一面に浮いていました。

何回も繰り返された濠の清掃工事で、蓮池が潰されたまゝになって居りました。が今自然に芽生え初めた蓮が夏の朝、夕、道行く人々の情緒に和んで居ります。「朝早く起きて蓮池に行っごらん、花が開く音が聞こえるから」そんな幻のような言葉を母親から聞かされた事もありました。

あの見事に咲いた蓮の花も散っ

て、秋風が吹き始め、円錐形の殻の実が実り始める頃になると、月の出た夜に、私たちは蓮池の前で、着物の両裾をまくり上げ結びつけて着物を袋にしました。蓮池に下りた私たちは、月の光を頼りに大きな葉の並んだ上に顔を出している蓮の実の殻を背のびをして、挽取っては、腰のまわりに突っ込んで、十個位になると石垣を登ったのでした。初めて食べた蓮の実の旨さに味をしめて、何回かそんな芸当を繰り返しました。御用邸に宮様がお出になっていない時でした。小学校の三、四年生の頃だったでしょう。

あの城の正門、三の丸から二の丸への道は、私の子供の頃は勿論、昭和三十年頃までは普通りの石垣で築かれた道でした。貴重な歴史的遺産を打ち壊し、アーチ形の土橋にし両方の濠を共通にしてしまった。何んのために城郭の濠の原型を変えるような事をしたのでせうか、土木工学上からも無理な工事のため、城内で工事を始める毎に、現在のような補強工事が施工されて居ります。このめがね橋も江戸時代から築城されて来た原型に復元して頂きたいと思えます。城址に生れて八十年、小田原に、へばりついて、城址や三の丸周辺の転変を見ながら育って来た人間の願ひです。

明治以後 小田原劇場物語 (一)

石井富之助

はしがき

演劇や映画が市民生活の中で大きな役割をになっていくことはいつの時代においても言えることであろう。ところが、それが余りにも身近かなものであり、日常的でありすぎるためか、地方においてはほとんど記録がなく、その変遷、推移を探究することはなかなか容易でない。

幸い、小田原には写本「劇場桐座由緒書」、中川初太郎氏の「桐座記録」、安藤正作氏の「小田原の芝居の思い出」「小田原映画五十年史」その他磯部平七氏の覚え書等があって、どうやらその歴史を辿ることが出来る。

そこでこれらの資料にわたし自身の見聞を加え、一つひとつの資料としておことうと試みたものが本稿である。

一、劇場附寄席

1 桐 座
「声色は小田原までは通用し」という古川柳がある。

天下の喰根根は江戸への関門であったから、ここを嚴重に固めるために徳川氏は小田原に三河以来の譜代大名である大久保氏を置いて、小田原までは江戸のうち、箱根を越えた旅人が小田原に着くと、江戸はもうすぐと考えたものであった。

だから、何でもかんでも箱根が境になっていて、江戸の千両役者の声色も小田原までは通用するが、箱根を越えたらわからぬといふのがこの川柳の解釈であろう。

小田原までは身内だといふくらい軽い意味だけで、この解釈はよいのかも知れない。しかし、よくよく考えてみるとこれだけではどうも納得がたいところがある。去る十月一日(昭和三十九年)に開通したばかりの東海道新幹線に乗れば、たった四十五分で東京へ行けるという便利な世の中になっても、声色がわかるほどにそう度々東京へ観劇に

出かけることは容易でない。まして江戸時代に途中戸塚から程ヶ谷あたりに一泊して、二十里の道を芝居見物に行くことなどは思いもよらない。

ところが、小田原にはこの川柳に詠まれている通り、声色がわかるほどではないにしても、江戸の名優の芝居をしばしば観ることのできる機会があった。

それは小田原に桐座という立派な劇場が江戸の初期からあって、上り下りの名優はもとより、箱根へ湯治にきた江戸の役者は度々ここで興行を行なっているからである。

そんなわけで、小田原の人たちは、何もわざわざ江戸まで行かずとも、結構一流の江戸歌舞伎を観ることができ、したがって芝居通も相当いたと考えられる。「声色は小田原までは通用し」というのは案外ここまでのことを読んでいるのかも知れない。

この桐座は昔の城下町を南北に貫く甲州街道を北に行き、いわゆる御府内を一步外に出た寺町というところにあった。その発祥年代はいまだ詳かにし得ないが、記録によれば寛文六年以前はすでに存在していたことは事実で、江戸を中心とする関東の劇場の中で最

も古いものに属することが知られる。

座主は桐尾上という女舞太夫で、寛文六年、桐大内蔵とともに江戸木挽町で桐座の櫓をあげて歌舞興行を行なっているが、これまた関東出身の女歌舞伎の始ともいふべきものとして注目しに値する。

しかも、桐尾上の本家である大橋家は大永三年、北条氏綱の時代に小田原に來住して以来、代々北条家の舞太夫職として仕え、北条氏没落後も大久保、稲葉等の各城主から同様の処遇を受けるとともに名字帯刀も許されたりして、連綿として明治に及んでいる家柄である。桐家は代々尾上を襲名し、女舞太夫を相続し、本家を共同経営者として桐座を経営してきたのであるが、歌舞伎関係の者がいわゆる河原者として蔑視された時代があって、ひとり桐座のみが特別な地位を保持していることは他に類例を見ないところである。

かくの如く、桐座は由緒古く、日本演劇史上においても特異な存在であったにもかかわらず、最近では桐家の名跡すら忘れられようとしていた。小田原市長鈴木十郎氏ならびに演劇研究者、劇作家として知られた故木村錦花は深くこれを惜しみ、

相計つて昭和三十一年桐家名跡保存会を結成し、元帝劇の名女優として知られた森律子に桐大内蔵同じく村田嘉久子に桐長桐、小田原出身の加藤澄代に桐尾上の名を贈り、その襲名披露公演を箱根湯本の観光会館で開催したことはよく人の知るところである。また木村錦花氏はこれと時を同じくして、神奈川県文化財調査報告書に「小田原桐座の発見」と題する研究を発表して、桐座の全貌を明らかにした。

しかし、それ以後桐座関係資料が相当発見されてきたので、この研究はわたしが継承して現在に至っているのであるが、この間に天明四年江戸で市村座の控櫓として興行した、幸若与太夫を祖とする桐長桐の桐座との関係も次第に分明し

てきている。これら桐座についての詳細はいずれ「小田原桐座の研究」と題して発表しようと考えているので、ここでは明治以後の桐座について大体を述べることに止めておこう。

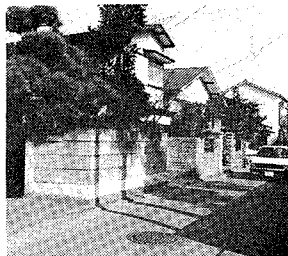
「劇場桐座由緒書」を見ると、明治以前に一つだけ紹介しておきたいことがある。それは安政六年に桐座が横浜進出を企図したことである。

安政六年五月武州神奈川横浜に於て外国交易開港の節先祖よりの由緒書並びに吉例出稼興行の件を以て、横浜表外国奉行村垣淡路守(願上候処、同年七月願済みの上新地拝借致候。則ち旧弁天通に於て五十間四方の地に

拝借仕り、右場所に於て表間口十五間、奥行二十三間の舞台小屋建て常芝居興行可致之処、小屋普請金主半途にて異変に相成り、依之右の拝借の場所其儘地上に致候

ということでの劇場建設はついに挫折してしましたが、同じ安政六年には畑宿の本陣若荷屋畑右衛門が本町一丁目大通りに湯本細工のステーキ・ペン・ショップを開いている。開港をあてこんで横浜へ横浜へと草木もなびいた、当時の有様が思い浮べられて興味深いものがある。

桐座はさらに明治五年申年二月、同国大住郡伊勢原村組合廿五ヶ村大惣代神戸村名吉川正治より願に依て、右伊勢原村に当桐座出張として分座致候候趣に付、足柄原庁に願上候処早速御聞濟に相成候間、右場所に桐座名儀を以て、櫓を上げ、年内春秋両度づつ興行致候、其後御改正以



今は住宅地の桐座跡

来右場所打止候

とあるように伊勢原にも分座したりして、外部進出になかなかの意欲を見せているが、本元の小田原桐座はどうなっていたか。

明治の始め御一新に付、女舞大夫御座に相成、依之尾上名籍を廃し大橋浦太郎同居となるなり。尤桐座芝居狂言座の儀は古来の儘有之也すなわち、この時桐家は

廢絶して尾上は本家の方へ帰ったのであるが、芝居興行は従前通り行なうというのである。

しかし、それから明治十八年に至るまでの記録は全くなく、桐座の大道具方であった中川金太郎、初太郎父子の書きとめておいた寛書「桐座記録」は明治十八年八月の柿葺落から書き始められているのである。

なぜ改めて開場式をやることになったかという点、その頃すでに大橋家では桐

座を維持することが出来なくなり、桐座は寺町全体が引き受けたのであったが、これも永続させずまさに絶の悲運に陥ろうとしている。しかし、この由緒ある

劇場をつぶすのは遺憾だといふことで、磯崎半次郎、同大二郎、石井音二郎、中戸川忠三、小瀬村伊兵衛の五氏が協同して劇場を改築し、華々しく開場したものであった。

柿葺落は大阪の中村福助一座で、主な顔触れは坂東彦十郎、坂東秀調、坂東鶴之助、中村政次郎。出し物は、だんまり市原野・今川大合戦・那須与市西海颯(乳母争)・寿曾我対面であった。

なお当時の桐座の規模は総坪数四百八十五坪で、立家二階棧敷二百八十坪、仕切場一坪、花道五尺八間、舞台間口九間奥行四間半、廻し舞台四間、せり出し六尺九尺一ヶ所、スッポンせり三尺四方二ヶ所、楽屋二階一間土間、太夫座一坪、床山二坪、役者部屋二十二坪、衣裳部屋四坪、大小道具部屋三坪その他というものであった。

桐座はこうして開場をしたものの、もともと小田原の町を一步外に出た不便なところに着てられたものであるから、次第に客足が遠

くなり経営不振になるのは当然で、この時以来、幾度か経営者が変わり、苦難の途を辿って、大正の初めにはついに青物市場に売却されるに至った。その後、また

有志者に買い戻されて劇場となったが、これまた成績不振を極め大正十二年九月の関東大震災によって倒壊後は再びその姿を見ることはできなくなつたのである。

これらの変遷の詳細については、先にも述べたとおり後日明らかにするつもりであるので、ここでは一応明治十八年以後の主たる興行を列挙しておこう。

明治二十年八月、市川九蔵一座
。市川九蔵・沢村訥子、沢村源之助、沢村源平
。加羅先代萩(花水橋より御殿床下、対決刃傷まで)・時今也桔梗旗揚(本能寺より馬盃、大功記十段目まで)
明治二十四年三月、川上音二郎一座
。川上音二郎、若宮万次郎、金泉丑太郎、青柳捨三郎、佐藤歳三、藤沢浅次郎
経國美談・大井憲太郎・島田一郎梅雨日記・蜃気楼将来日本・五大州・西郷隆盛督勢力・余興演説オッペケペー

明治二十四年八月、坂東家橋一座
。坂東家橋、中村富士郎、坂東竹松・尾菜三郎、中村右多作、中村勘五郎

。お目見得だんまり、富治三升扇曾我・近江源氏先陣館・伊勢音頭恋寝刃
明治二十五年八月、市川左團次一座
。市川左團次、市川荒次郎、市川米蔵、市川莚升、市川紫若、市川時若

。慶安太平記、神靈矢口渡、籠釣瓶花街酔醒
明治二十六年四月、望月正義、村田正雄一座
。望月正義、村田正雄、竜井鉄骨、金子仙之助、望月梅子
。清水定吉、相馬事件
明治二十六年八月、中村芝翫一座
。中村芝翫、片岡市蔵、中村福助、坂東秀調、中村訥助、中村児福、片岡松童

。月欠血恋路宵闇、菅原伝授手習鏡、八陣守護本城、京人形
明治二十七年一月、山口定雄一座
。山口定雄、本田小一郎、佐藤幾之助、津坂幸一郎、酒井某
。大悪僧

明治二十八年、沢村訥升、尾上幸蔵一座
。沢村訥升、尾上幸蔵、沢村百之助、市川小團次、沢村源平、沢村宗三郎、沢村春之助

。有馬猪騒動、苜蓿桑門筑紫簾
明治二十九年、市川九蔵、市川紅若一座
。市川九蔵、市川紅若、岩井松之助、市川猿三郎、市川茂太郎、市川喜猿

。仮名手本忠臣蔵、鎌倉三代記、明烏夢泡雪
明治二十九年、沢村訥子一座
。沢村訥子、沢村源之助、沢村宗三郎、中村種五郎、沢村長五郎

。伊達騒動
明治二十九年、角藤定憲一座
。角藤定憲 外五十名
。小田原出兵、騎兵小野田勝三郎名譽戦死
明治三十四年、坂東鶴之助一座
。出世景清、勸進帳、おその六三
明治三十九年三月、尾上菊五郎一座
。尾上菊五郎、尾上梅幸、尾上松助、尾上菊雄、尾上菊二郎、尾上蟹十郎

。夜討曾我・紅葉狩、清水一角、摂州合邦辻、ある。

。市川女寅、市川男寅、片岡十蔵、市川九団次
。だんまり、源平右引滝、川中島(輝虎配膳)

「明治以後小田原劇場物語」は神奈川県立図書館発行の『神奈川史談』第七号(昭和四〇・三)に掲載したもので、大佛次郎氏が当時神奈川新聞に連載していた「小さい隈」の中で大変ほめてくれた。それから二十余年を経て今ではすっかり忘れられた観がある。この種の研究はほかにないので、ここにあらためて載せてもらうこととした。

なお「小田原の桐座」は『神奈川県史』各論篇3、文化に載っているのので、あわせて御覧願えば幸いです。

附記

相州上曾我村瑞雲寺

開基争論記(二)

西山銚太郎

右総寧寺役僧宗楷取扱申聞候ニ付猶又八三郎より御吟味願致度旨申聞候ニ付然上者頭向江申立先寺社奉行所江御掛合之儀相願可然哉与左之通り日向寸切印紙ニ而差出

書付 本多八三郎

覚

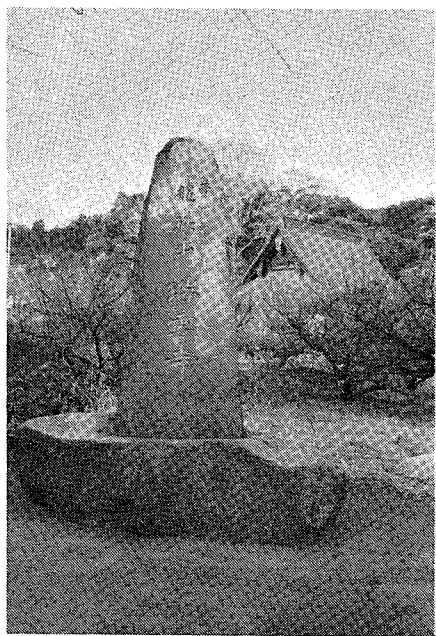
私儀是迄差出置候由緒書ニ者書加無御座候得共先祖本多豊前守常金儀伊勢國司北畠家江属其後關東江下向仕北條家江属嫡子豊前守信親知行所之内相州足柄上郡上曾我村ニ草庵御座候を開基仕龍珠山瑞雲寺与号候同人儀大正十五年四月二日病死仕同寺江葬法名龍珠宗洞居士与申則位牌ニ開基龍珠宗洞居士与彫刻仕瑞雲寺江差置墓所も同寺ニ御座候其後北條家没落後上曾我村ニ蟄居罷在候処豊前守曾孫本多八右衛門儀慶安三寅年御当地江被召出御書院番頭大久保右京亮与力江被 召抱私迄七代罷成候御当地江罷出候節本多八右衛門弟惣左衛門与申者同村百姓罷成

其子孫当村寛左衛門与申代々同村百姓ニ而相統同瑞雲寺菩提所ニ而罷在候八右衛門御当地江罷出候節より瑞雲寺附届并年忌法用寺寛左衛門方ニ而可相動由申談是迄無滞法事等仕来候八右衛門儀者御当地三田寺町同宗清久寺菩提所ニ仕候寛左衛門儀代々私方江書状通證仕罷在候然処瑞雲寺儀去西年焼失仕翌成年寛高与申僧瑞雲寺任職仕本堂建立致度由檀家之ものへ勸化仕候節寛高寛左衛門江申聞候者其元儀者當寺開基之由位牌ニ茂開基之文字有之候得者寺建立之儀者一廉出精仕候様申し候ニ付寛左衛門申候者至極尤之儀ニ者候得共先祖之儀者格別當時私儀者病身ニ而百姓渡世茂人並ニ相成兼追々貧窮ニ相成候間此度建立ニ付多分之金子差出候儀者相成兼候得共先祖以来菩提所之事故身分ニ應候勸化者可致与相答且又外ニ金子多分差出寺建立出来致候ハ、其者中興開基与唱候共存寄無之旨申之候処其後寛高儀外檀家之者相語ひ寛左衛門先祖開基之位

牌者疑鋪申掛右位牌削取可申旨申候ニ付親類一同瑞雲寺江罷越相止與候様種々相頼候得共承知不仕候ニ付左候ハ、江戸表ニ同姓本多八三郎与申者有之候間右之者江一通掛合候相待與候様談書状ヲ以私方及掛合候内寛高如何相心得候哉右位牌破却致寛左衛門ニ相戻墓所ニ茂繩張致掃除者勿論參詣等茂不相成旨申断候ニ付同人も驚入其ノ段早速飛脚ヲ以私方江申越候ニ付私家来瑞雲寺江差遣シ右之様子問合候処寛高申聞候者私自身ニ參候ハ、面談も可致候得共使之者ニ而者面会不致候旨相断候故右家来寛左衛門方江罷越同人ヲ以寛高方江及掛合候得共強申寡面会茂不仕掛合行届兼候由右家来罷席申聞候私儀茂先祖之位牌被致破却候而ハ甚敷敷寛高致方余不當之様奉存候間早速御吟味奉願度

存候得共得与勘弁仕候処免角隠便ニ相濟候様仕度又々家来差遣寛左衛門江相談為仕寛高江茂為談候処以前之通り我意申募私先祖豊前守開基与申儀全偽ニ候間右位牌破却致候旨其上存寄茂有之候ハ、勝手次第可致旨申聞候得共私儀者開基之議論者不仕候得共龍珠宗洞儀者私祖先ニ相違無之候ニ付當時之菩提所清久寺江茂同様龍珠宗洞ノ位牌石碑安置仕年忌法事等私方ニ而茂相動瑞雲寺ニ者先祖より有来之儘ニ而是迄代々之住持年忌法事等寛左衛門方ニ而相動當住寛高代ニ相成候而茂同様之儀ニ御座候処此度如何之所存ニ候哉右体之始末何共難心得依之家来ヲ以村役人江茂及掛合候処寛高儀者右体之強情者对ニ支配違ニ而取扱難致旨相断候ニ付無抛御当地小日向総寧寺儀者触頭之儀ニ茂御座候

瑞雲寺山号碑



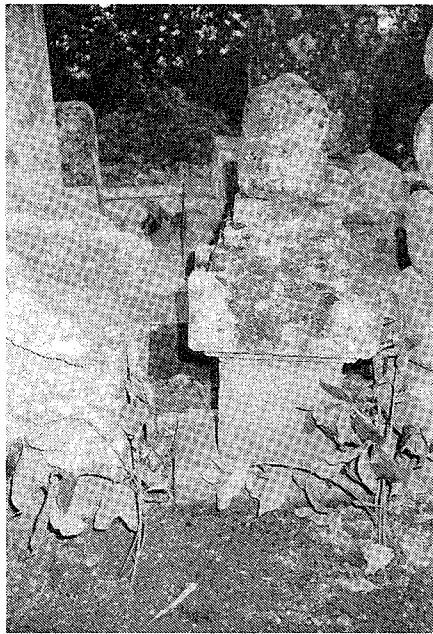
故右役僧宗楷江取扱之儀相頼候処承知仕寛高江種々理解申聞候得者其席ニ而屈伏仕候得共下宿仕候得者外腰押致候者茂有之候哉又々罷出彼是難決申聞候故猶又役僧申聞候者出家之身分ニ而古来有来候位牌ヲ破却致候儀不相濟段申聞候得者以前之通其席ニ而者屈伏仕又々下宿仕候而又候難決申聞役僧宗楷儀茂當惑仕迎茂外腰押仕候者有之候而者取扱難致旨断申聞候右破却之位牌寛左衛門方より私方江取寄一読仕候処開基龍珠宗洞居士与申文字削取候得共文字者分明ニ相見申候尤総寧寺役僧寛高呼出候節過去帳取寄候処龍珠宗洞居士之法号相記有之趣申聞候余心外之致方ニ付御吟味願等茂仕度奉存候得共 公刃江御苦勞奉掛候茂奉恐入候儀ニ付可相成儀ニ御座候ハ、寺社奉行所江御掛合被成下先ニ仕来之通致候様寛高江御理解被仰聞被下置候様奉願度此段申上候以上

子八月 本多八三郎印

右日向半切式通八月晦日權兵衛殿江差出候処兩三度面増減致書置差出候処猶又九月廿四日通帳ニ而左之通申来

一 本多八三郎

右先達而差出候先祖位牌破却一



本多豊前守信親墓

件之儀ニ付社奉行江之達願書付之内被致掛紙被相下候間右掛紙触頭役僧名前相札書入差出候様通達可有之候則書付相下候落手可被致候

右申達候以上

九月廿四日

被仰下候趣奉得其意候且書付式通奉請取候以上

九月廿四日 加藤栄助

右役僧名前相札書面認置差出候文面右写置候通ニ候其以前之文面畧之尤格別相違之事無之候猶又通帳ニ而左通申来

一 本多八三郎

右先祖之位牌被致破却候一件書付之趣御吟味願可被致旨被相違候依之御吟味願書早々差出候様通達可有之候

十月四日

被仰下候趣奉得其意候以上

十月四日 加藤栄助

御吟味 本多八三郎

私儀是迄差出置候由緒書ニ者書加無御座候得共先祖本多豊前守

後関東江下向北條家江屬嫡子豊前守信親知行所之内相州足柄上郡上曾我村ニ草庵御座候を開基

仕龍珠山瑞雲寺与号候同人儀天正十五亥年四月二日病死仕同寺江葬法名龍珠宗洞居士与申則位牌ニ開基龍珠宗洞居士与彫刻仕瑞雲寺江差置墓所茂同寺ニ御座候其後北條家没落後上曾我村ニ

塾居仕罷在候処豊前守曾孫本多八右衛門儀慶安二寅年御當地江被 召出御書院番頭大久保右京亮与力被 召抱私迄七代罷成候御當地江罷出候節本多八右衛門

弟惣左衛門与申者同村百姓罷成其子孫當村寛左衛与申代ニ同村百姓ニ而只今迄相統仕同瑞雲寺菩提所ニ而罷在候八右衛門御當地江罷出候節より瑞雲寺江附届并年忌法事等寛左衛門方ニ而可相動由申談是迄無滞法事等仕来候八右衛門儀者御當地三田寺町同宗清久寺菩提所ニ仕候寛左衛門儀代ニ私方江書状通證仕罷在候然ル処瑞雲寺儀去ル酉年焼失仕翌戌年寛高与申僧瑞雲寺住職仕本堂建立致度由檀家之者江勸化仕候節寛高寛左衛門江申聞候者其元儀者當寺開基之由位牌ニ茂開基之文字有之候得者寺建立之儀者一廉出情仕候様申之候ニ付寛左衛門申候者至極尤之儀ニ候得共先祖之儀者格別當時私儀者病身ニて百性渡世茂人並ニ相成兼候故追ニ貧窮ニ相成候間此度建立ニ付多分之金子差出候儀者出来兼候得共先祖以来菩提所之事故身分ニ應候勤化者可致旨相答且又外ニ金子多分差出寺建立出来致候ハ、其者中與開基与唱候共存寄無之旨申之候処其後寛高儀外檀家之者相語ひ寛左衛門先相開基之位牌者疑鋪由申掛右位牌削取可申旨申候ニ付親類一同瑞雲寺江罷越相止候様種々相頼候得共承知不仕候ニ付左候ハ、江戸表ニ同性本多八三郎与申者有之候間右之者江一通及掛合候迄相待候様申談書状を以私方及掛合候内寛高如何相

心得候哉右位牌破却致寛左衛門江相戻墓所江茂繩張致掃除者勿論參詣等茂不相成旨申断候ニ付同人儀驚入其段早速飛脚を以私方江申越候ニ付私家来瑞雲寺江差遣右之様子問合候所寛高申聞候者私自身ニ參候ハ、面談も可致候得共使之者ニ而者面会不致候旨相断ニ付右家来寛左衛門方罷越同人ヲ以寛高方江及掛合候得共強情申募面会茂不仕掛合行届兼候由右家来罷帰申聞候私儀茂先祖之位牌破却置致候而ハ甚歎敷寛高致方余リ不當之様奉存候間早速御吟味奉願度存候得共得与勤弁仕候処免角穩便ニ相濟候様仕度又ニ家来差遣寛左衛門江相談致致寛高江茂為談候処以前之通り我意申募私先祖豊前守開基与申儀全偽ニ候間右位牌破却致候旨其上存寄茂有之候ハ、勝手次第可致旨申聞候得共私儀者開基之議論者不仕候得共龍珠宗洞儀者私先祖ニ相違無之候ニ付當時之菩提所清久寺江茂同様龍珠宗洞之石碑位牌安置仕年忌法事等私方ニ而も相勤瑞雲寺ニ者先規より有来之儀ニ而是迄代ニ之住持年忌法事等寛左衛門方ニ而相動来當任寛高代ニ相成候而茂同様之儀ニ御座候此度如何之所存ニ候哉右体之始末何共難心得依て以家来村役人江茂及掛合候処寛高儀者右体之強情者對ニ支配違ニ而取扱難致旨相断候ニ付無抛御當地小日向総寧寺儀

者触頭之儀ニ茂御座候故右役僧宗楷江取扱之儀相頼候承知仕寛高江種々理解申聞候得者其席ニ而者屈伏仕候得共下宿仕候得者外腰押致候者茂有之候哉又ニ罷出難決申聞候故猶又役僧申聞候者出家之身分ニ而古来有来候位牌ヲ破却致候儀不相落段申聞候得者以前之通其席ニ而者屈伏仕又ニ下宿仕候而又候難決申聞役僧宗楷儀も當惑仕逆茂外腰押仕候者有之候而者取扱難致旨断申聞候右破却之位牌寛左衛門方より私方江取寄一覽仕候処開基龍珠宗洞居士与申文字削取候得共文字ハ分明ニ相見申候尤総寧寺役僧寛高呼出候節過去帳取寄候処龍珠宗洞居士之号写相記有之趣申聞候余リ心外之致方ニ御座候依て於奉行所御吟味御座候様仕度此段奉願候以上

文政十一年十月 本多八三郎印

河野権兵衛殿

右美濃紙堅折式通十月上旬差出候処同月廿九日御用番青山下野守殿江進達ニ相成寺社奉行松平伊豆守江御渡被成伊豆守より総寧寺ト寛高呼出相達候様子十一日朔日出之総寧寺飛脚二日ニ着之由



幕末、中島・本久寺に住持された成貞法尼について(一)

小野 意雄

内容

- 一、とはずかたらず
- 1 「桜狩り」の詠歌
- 2 父武者小路実純卿
- 3 京洛での成貞 (以上本号)
- 二、女人結婚
- 1 「葦上夢通路」劍持広告
- 2 清水谷実指卿
- 3 「御点」有浦章、「文」吉岡信之
- 三、本久寺の再建
- 1 日頃の帰山と紀撃人
- 2 貞庵の構図
- 3 再建工事
- 四、シールト事件
- 1 旅立ち
- 2 シールト事件に巻込まれて
- 3 小倉家と成貞
- 別稿 「成貞法尼出自考」

はじめに

この成貞法尼という尼僧は、江戸後期天保のはじめに小田原に来て、中町三丁目(旧字名・中島)の本久寺の堂宇を再建し、和歌や易を通して多くの人びとと交わり、幕末の安政六年に六十七歳(七十歳か)の生涯を終えられた女性ですが、墓碑銘によると、武者小路徹山翁の娘です。

成貞法尼の来歴、どういふ事情で小田原に来住されるようになったのかは、まだ十分判かりません。今まで成貞法尼について触れた記述や話は、ほとんどありません。幾人かの郷土史家に、問い合わせしてみました。知らないという返事でした。

この覚書では、今まで知りえた資料をとりまとめ、今後の研究の素材としたいと思います。幕末を生きた女性について、女性史の観点から、最近いくつかの本が出ております。小田原の幕末史を彩る女性の一人として、成

貞法尼についてアプローチしてみたいと思うのです。それにしても、天保のはじめから安政六(一八五五)年という問題をほらんだ時代の流れの中で、公卿出身の女性が一人で三十九年近く、小田原に来て住んでいるのです。どういふ事情が、彼女の生涯の背後に動いていたのでしょうか。彼女について調べてみますと、さらにいろいろと知りたくなります。そこで今後の研究のための手掛かりとして、思いつくままに、この「覚書」を記したいと思います。

彼女自身、歴史のかたに忘れ去られてしまっていますが、忘れ去られてしまった彼女をめぐる事情の謎解きを通して、幕末の忘れられた小田原の歴史の一端、一面を発掘できればいいでしょうか。

一、とはずかたらず

1 「桜狩り」の詠歌

成貞についての初見の資料は、「小田原の金石文 二」(小田原郷土文化館研究誌 第四号昭和四三年三月発行)所収の「成貞法尼詠歌碑」という調査報告ならびに中野敬次郎氏による解説でした。

この歌碑によって、成貞についての大きなイメージングはできます。碑文は、小西正蔭による「撰並書」で、変体万葉仮名で記されていて、読みづらいのですが、文字の羅列の中から、彼女の京都への望郷の念がにじみ出ており、ひとしおの感慨を覚えますので、まずは報告書通りに紹介し、あとに若干意訳をふくんだ読み下し文を付けます。

成貞法尼詠歌碑

所 在 小田原市中町三丁目一番六七号本久寺

建設年月日 文久元年五月

構造 縦一五七センチ 横五八センチ

題 字 成貞法尼詠歌碑

撰文・作者 小西正蔭(撰文) 成貞法尼(詠歌)

筆者 小西正蔭

碑文 (表) 成貞

遊ふ也美能 道母 当度良武 桜狩

賀藏之転可弊流

花乃悲閑理耳
夕やみの 道も たどらむ 桜狩
かざしてかへる

花のひかりに

(裏面)

成貞法尼は宮古のう万札な流賀函さ東にく陀理て二十登世阿まり何く札とい所しま例之那可にこの御社をあたらし九都く理閑へ良札

小西正蔭

辻村陳質

蔵しふかか理幾春弁て未志世のひび者於

劍持広吉

野沢直道

歌を面永く都たへま保しとて於もふ度知力越

安は勢てこ当悲石碑に恵り川く流工難牟

文久元年五月

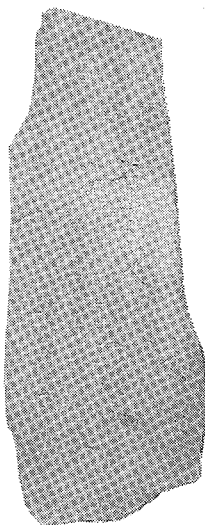
継亡父尚哉之遺志而

男小西正蔭撰並書

(読み下し文)

成貞法尼は 都の生まれなるが 函左東に くだりて 二十とせ余り 何くれと いしまれしなかに この御社を 新しく 造りかえられる あるいは 言の葉の道 あらかたの わざなどに ころざし 深かかり 幾春 わかちて 若かりし世の日日を 奥津城に 記るせられいと そのむかし あかぬ日に 読みおかれたる 歌を見せ 永く伝へまほしとて 思ふほどに 知力あげ合 わせて 今年 石碑にかざり かく伝へなむ

成貞法尼歌碑



(中野氏による解説)

成貞法尼は、本久寺の妙見堂の堂守の尼であった。碑文によると尼は、京都の生まれであるが、小田原に来て二十余年、この地に住んで、神社を新しく建てたり、国文・和歌にいそんだりしたとあるが、神社とは、妙見堂の側にある種河神社の再建を指すものであろう。碑は、小田原の旧家小西葉舖の十一代当主正蔭(国学者、書道家)が、養子十代直哉の遺志によって建立したものであるが、直哉は歌道に精進し、家を広予舎と名付け、同志と歌にしたしみ、自詠集「広予舎歌集」もあるほどだから、恐らく成貞法尼も歌道の同志であつたらしい。建設者の中に辻村陳實、劍持経広、野次直道などの名が見えるが、何れも小田原の商家で、直哉と共に歌道に親しんだ人びとであつた。

碑に刻された歌は、成貞法尼作(夕やみの道もたどらむ桜狩 かざしてかえる 花のひかりに)であり、文は小西正蔭の撰書であり、正蔭は、国学者鬼島広蔭の門人であるが、碑文は、正蔭の国学振りを見る好個の資料である。

2 父武者小路実純卿

去る六十二年夏、本久寺歴代住職の墓域に、成貞の墓碑があることが判かりました。墓域の正面にある四基のうち右側の一基です。位置関係からみて、本久寺においての彼女が特別の存在であることを知らされます。

一 四月十二日 梅薫院成貞日香法尼

永代回向 第一ナリ 妙見宮再建拝殿開口迄

成貞法尼



(墓碑正面)

梅薫院成貞日香法尼

(左側面)

浦風に

雲ながれ去り

さやかに

安政六巳未年四月十二日

(裏面)

成貞□□□□□者小路徹山翁之女也早寡

而家居焉能和歌精易理又信仏乘意雅髮為尼雅

号薫法名成貞稟性温順貞実頗有丈夫之風後者

故遊閑左止に此地既二十有年也嘗中興法泉

坊再建妙見堂且付福田以備修理資也尼恒自処

以儉素而有余財則悉以供仏事成資僧徒暮賑貧

妻也今茲孟夏之始会罹痔疾于幾病厚矣祈療尽

方無効終終和歌一首突然逝矣享年六十七時安

(右側面)

政六巳未四月十二日也遠近無聞而不惜者復埋

于当山堂中葬儀之日貴賤群集恰如喪者母也可

以知生前也乎尼平素無他者好唯有與乃詠和歌

以自樂耳而多年所詠乃和歌無心曹稿以故多叢

失措哉銘曰

夙沾法雨 長絶塵縁 和歌鉉妙 周易洩玄

經營宝殿 寄付福田 慈及飛走 德蒙方円

梅薫遠至 誠貞永伝 維銘与右 銘諸題年

法泉坊 大功有之 六十七歳

有明の 月

名は もろこしの

安政の大獄の年です。この事件に関連して翌六年二月十七日には、青蓮院宮尊親國王・内大臣一條忠香らが、幕府の圧力によって謹慎させられ、成貞の没した十日後の四月二十二日には、鷹司政通・輔熙・近衛忠熙・三條実万らが、謹慎・剃髪をさせられています。ついで六月十八日には、議奏徳大寺公純が、兎角幕府に対して協同的でない、公武一和の妨げになるという理由で、辞職させられています。そして、翌万延元(一八六〇)年三月には、桜田門外の変が起きます。十一月には、皇女和宮の將軍家茂への隆嫁発表です。

安政の大獄の年です。この事件に関連して翌六年二月十七日には、青蓮院宮尊親國王・内大臣一條忠香らが、幕府の圧力によって謹慎させられ、成貞の没した十日後の四月二十二日には、鷹司政通・輔熙・近衛忠熙・三條実万らが、謹慎・剃髪をさせられています。ついで六月十八日には、議奏徳大寺公純が、兎角幕府に対して協同的でない、公武一和の妨げになるという理由で、辞職させられています。そして、翌万延元(一八六〇)年三月には、桜田門外の変が起きます。十一月には、皇女和宮の將軍家茂への隆嫁発表です。

ところで、成貞の辞詠歌のなかの「もろこし」の一句が気にかかります。「もろこし」は、唐土(中国)ではなく、外国の意味でしょう。当時の使用例としては、大田垣蓮月尼が富岡鉄斎に贈った詠歌、「もろこしの つきのかつらの 一本も をりもてかへれわが家づとに」や、伊豆下田で米国初代駐日領事ハリスの世話をした「唐人お吉」があります。「開国」問題についての、成貞の関心の深さを示す一句なのでしょうか。彼女自身「開国」問題に何等か係わりがあり、そして彼女の死自体も、安政の大獄に関わる心労から来るものでしょうか。私は、彼女の離京が、シーボルト事件と関係しているのではないかと思います。この点については、後述することになります。

つぎに、墓碑に成貞の父と記されている武者小路徹山についてアプローチしてみました。松浦静山著『甲子夜話』巻六(十三)に、つぎのような話が載っています。

林氏言。近年京より一奇人來たりて和歌を唱へしに、たちまち人びの風靡せられて、信徒するもの多かりしが、官よりひそかに沙汰あり、其人恐れて帰京せり。実は武者小路家の子にて、少将までに成し人とよ。年少豪邁放佚にて、三條とか五條とかの繁華の地にて、人を刃殺して糜爛となりたるが、姓名を匿して東來せるとなん。鉄山と号しける。唐伯虎、徐文長などの類にて、其人は兎に角も、文采はすぐれたることにて、其家に恥ざる才と思わる。惜しむべし人なり。伝え聞し歌の中に暗記せるは、

秋の日も 入江の波は 色くれて

残る尾花に 鶉啼なり

冬 杜

木がらしの 吹尽したる もりの中に

なお枯のこる かしは手の声

この二首などは、近世の秀逸とも言べき詠なるべし。

「鉄山」と「徹山」。これは同音異字で、同一人物の号と考えてよいでしょう。

ところで、成貞の生まれた時期の寛政四〜五年頃の、武者小路家の二十歳前後の人物をあたってみますと、林氏の言う話に相当しそうな人物として、実純がおります。

実純は、武者小路公陰の養嗣子で、実は三條季晴の末男です。父季晴は、従一位前右大臣。三條(転法輪)家は、五摂家につぐ清華家です。また実純の跡をついだ嗣子の公隆は、清華家につぐ大臣家の三條西前大納言実称末男です。

実純は、享年六十二歳で逝くなり、翁と呼ばれるにふさわしいのですが、寛政一(一七五〇)年九月二十五日付で、二十五歳の若さで左兵衛佐を辞任し、ついで寛政四(一七六三)年二月十二日付で、従四位上の位記を返上していません。なお彼は「武者小路実純卿 御詠」一冊残す歌人です。徹山すなわち実純と考えてよいと思います。

時代は、どうだったでしょうか。幕府は、老中筆頭が松平定信で、田沼時代のおとを受けて、寛政の改革が進められていました。儉約令を柱とした緊縮政策、絵本や草紙類等に対する出版統制をはじめ社会風俗の矯正策と

川柳

高井喜雄

尊徳像しよつてる物を孫が聞き

もういらぬ年だといつて医者に行き

相続税払い農家が一つ消え

卒業式おえて始末書仕末され

円高に税々あえぐおらが春

ともに、朱子学以外の異学の講究を禁じ、湯島の聖堂を幕府官僚養成のための官製教育機関とし、幕府権力のもとの学問・技術の集中を図ろうとしていました。他方、定信は公武親和のため皇居造営等に努めておりますが、「尊号宣下」問題で、京都・朝廷側と激しく対立してしまっています。「尊号宣下」問題は、光格天皇が御生父典仁(スケヒト)親王に「太上天皇」の尊号を奉ろうとし、幕府方は、御生父であっても天皇ではなかった方に太上天皇の尊号宣下はおかしいと異議をはさみ反対した事件でした。

寛政二(一七五〇)年は、「寛政異学の禁」の年、また、翌三年から五年と「尊号宣下」問題で、公武の間が揺れ動きます。「参議以上群議……一 封各々思ふ所を申す」ようにこの寛政三年十二月の勅問に対して、徳富蘇峰によれば「その不可の意を、婉曲に表明したのは、前関白鷹司輔平、その子左大臣鷹司政熙の父子二人であった」と述べており、多くの公卿の考え方は、幕府に対して対抗的だったようです。時の関白は、一條輝良ですが、宣下賛成に意見統一するために、隠居・養嗣子縁組みなどを使つての、鷹司人脈から一條人脈への組み替え工作もあつたようです。武者小路家を賛成派へと組み替える政治的事情のなかでの、実純の進退だったのではないのでしょうか。とすれば、湯島聖堂の林家を継いだ大学頭述斎のいう見聞は、述斎の風評であつて、正鶴をえているかどうか、怪しくなります。

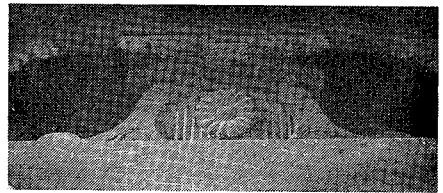
なお、武者小路家の家譜(東大資料)をみますと、実純には、「女子早世」の子がおります。この早世の女子が成貞ということもあります。というのは、東大資料は明治初年に大政官に提出されたものであり、提出に際して「早世」として、整理・編成したことも考えられるからです。しかし、墓碑銘は事実を示しているのとみてよいでしょう。

3 京洛での成貞

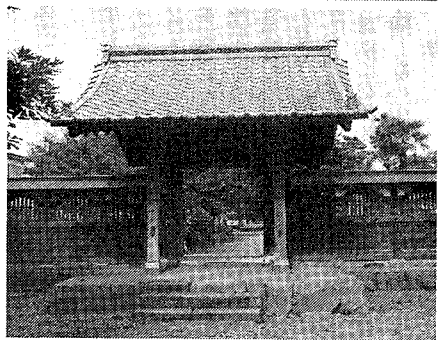
成貞が、和歌を能くしたことは、まさに血筋でしょう。また成貞の易理は、当時の儒学の動向のなかで、どう位置づけられるのでしょうか。これらのことについては今後の研究課題としておきたいと思ひます。

彼女は、若くして隠居した父のもので、和歌その他を

本久寺正門紋章



本久寺正門



学びながら育つたことでしょうが、公卿の姫の生涯は、他家へ嫁ぐ、家女房として婿養子をとる、宮廷に待す、徳川家上臈になる、僧籍に入る等のコースのいずれかでした。他家の養女・実子あるいは猶子になった上で、前述のコースのどれかをとるといふこともありつた。

ここで参考までに、実子と養子との区別について、ふれておきます。下橋敬長氏は、『幕末の宮廷』の中で、「堂上上方の系図をみますと、誰誰の実子何某とあるのは、決して真実の子ではなく、実は養子で、実の子ならば単に子とのみ書いてあります。養子ではあるが生家と全く縁を切り、生家の系図から全く氏名を抜き取って養家先の実の子の如くなるのが実子、里方と縁を切らず、実父母と養父母と両方に親子関係を持つておるのが養子で、実子になれば、生家の両親に不幸があつても、忌引きはできません。「仔細の所労」ありと称して、引き籠もるだけです。」と述べております。また、猶子は、家格借用の方式で、例えば「掌侍に出任の家格のものが、典侍に出任すれば、その家格の家の猶子とならなければなりません」と説明しております。

成貞の場合は、墓碑銘等からは、家居……雑髪……旅……小田原のコースしかわかりませんが、父実純の事情からすれば、他家の養女・実子または猶子となつた上、まず宮廷に出任していると思ひます。養(実子)先・猶子先は、どこだったのでしょうか。このことは、彼女の事

業の一つである本久寺再建資金のスポンサーは、誰だったのかに関係します。また、本久寺の山門の菊花の紋章にも関係しましょう。「桜狩り」の詠歌、「早寡」という銘文は、彼女の宮人としての青春を想像させてくれます。

寡婦とは、「夫をうしなへる女」いわゆる未亡人です。成貞の場合は、つぎのようなケースのいずれでも仮定できるとしよう。その一つは、いわゆる未亡人ですが、死別した夫との関係は、第一夫人というよりも、第二あるいは第三夫人であるかも知れないとするケース。その二つは、夫というよりもスポンサーや恋人（たとえば「雪

の曙」・「有明の月」のような）のケース。この場合に、後深草院のような夫は存命で、女が宮仕え辞退という境遇に身をおくことがありうることでしよう。異郷の小田原での自己紹介では、いずれの場合・ケースでも「早寡」で十分でしょう。

後深草院二條尼の「とわずがたり」の世界にダブらせて、成貞尼の生涯をイメージしたとき、登場人物構成は、どうなるでしょうか。二條尼をめぐる男性として、二條尼の仕える「後深草院」のほかに「雪の曙」・「有明の月」という仮名の人物、ほかに龜山院、近衛大殿がいます。成貞尼をめぐる男性の誰を誰に当てはめてイメージングするかは、後述においてしたいと思います。

雲の上の 御園に咲る 菊の花
ふらむも星の 数のごそ見れ
文化十四年詠草之中より
人人春の野に遊ぶ
すみれ摘 さくらかささぬ 人もなし
春はこころを 野へに湊ひて

寄月待恋
長月の 有明の月の 山の端に
いさよふ後も 見えぬ君かな
ある人のもとより 銀糸山と名つけし石に
あかねさす 紫の石も けふよりは
君か光に みかき添まし
という歌をへておこせし返しに
むらさきの 石とは見へず 雪の上に
霞匂へる 春の色かも

昭和六十六年十二月三日、第六次東海道五十三次宿場史蹟めぐりで、静岡県磐田市に於て見学の明治七年（一七七〇）建造の洋式学校。市民からは五階堂として親しまれ、現在郷土資料館として使用されています。国の指定史蹟。



見付学校 真壁敏男画

小田原藩主大久保忠真が、京都所司代として京洛にいたのは、文化十二年四月十六日から文政元年八月二日（一八五〇〜一八五九）まで、この頃成貞は、二十三歳から二十六歳の熟年代です。もし彼女が京都にいたとすれば、和歌を通して、成貞と忠真との交流の場があり、親しくお付き合いしていたかも知れません。

曙の侍従 忠真の詠歌
見渡せば 心にかかる くまもなし
月にまされる 雪の曙
成貞の辞世の詠歌「浦風に 雲流れ去り さやかなり名はもろこしの 有明の月」の心に、なにか照応するものがありはしないでしょうか。忠真は、文化十二年の頃三十五歳。自分を「雪の曙」とたとえる風流心・遊び心はあったことでしょう。ライバルの「月」を衆知のこととして。

文政十二年詠草之中より
南殿の桜をおもひ出で
立なれし むかしをおもふ 雲の上の
御階の桜 今や盛也

文政十三年詠草之中より（この年十二月天保に改元）
ねやのありけるはしめの三月尽に
あすもなを おなし弥生と脱かへぬ
常ならば 今かとおもふ 春もまた
入相のかねに つき果すして
ちなみに、成貞が東下りしたのは、文政十二年秋のことではないかと、思われます。忠真の詠歌と符合するところがありますから、二人の関係について、研究する必要があります。

忠真の詠歌『春鶯集』より
文化十三年詠草之中より
或人のもとよりひそかに南殿の桜をおこせたりければ
色に香に とりとり匂ふ 八重一重
けに九重の はなそ此花
右京太夫かもとより禁中の菊とて着綿したるをおこせければよめる

筆者 おのちお
住所 小田原市中町一丁目一番一六〇三号
TEL (自宅) 0465(24) 1469
(事務所) 0465(29) 0919

朝井閑右衛門

昭和初頭のころ小田原にて

隠岐 威重

朝井閑右衛門 古めかし
いな名だ。

号百三十五万円、新樹会
会員、国際形象展同人、
旧文展審査員、文部大臣
賞、和歌山、明治三八年、
住所鎌倉市由比ヶ浜四ノ
三ノ一三 電〇四六七―
二一―三三―

死亡の年月が出ていなかっ
たから数年前の出版だろう。
著名な画家の価格、簡単
な履歴を示す電話帳のよう
な分厚い本(画家便覧)の
一角を図書館(小田原)の
若い女性の司書の白い指が
さす。

「この方ですか?」「そ
うです」老人はうなずいた。
太い活字のすぐ横に号一三
五万円とこれも太い字で示
されていた。いかにもこの
道の専門家が使いそうな本
だ。

やっと閑右衛門を検べる
糸口がつかめた。が、その
糸の先は中々分らない。

確かに彼の文部大臣賞に
なった作品、老人の記憶だ
とサーカスの家族を画いた
三、四百号の大作、彼の画

風ではめずらしい明るい色
調だった。老人は学生の頃、
その絵を文展、上野の美術
館で見たこともあり、シリー
ズものの画集にものつてい
たことも憶えていた。が、
その時点図書館では分らな
かった。

閑右衛門は昭和の初頭
(一桁代)を小田原で無頼
の生活をおくっていた。絵
を画いていたが極貧の生活
のようだった。彼が何処か
ら流れて来たかは不明だが、
老人がまだ小学校の六年か
ら中学の二三年の頃、老人
が住む諸白小路の隣りの天
神小路の一角に巣くってい
たのをおぼえている。背は
並より少し高くもった体
形で、顔は赤銅色にやけ、
貧しい和服のようなものを
荒縄でしめていた。その顔
の中央に鬚髯が坐っていた、
眼は鋭く、だが清く澄んで
いた。日本人離れした顔だ
った。混血だという噂もあ
った。

若い司書嬢では埒があか
ぬので図書館長(山添猛氏)
をたずね教えを乞うた。館
長は閑右衛門のことをよく
知っていた。特に彼と小田
原とのつながりの点は詳し
かった。

鈴木元市長と彼、牧野信
一と彼の交友の様子を語っ
てくれた。

鈴木市長がニューヨーク
から市に送った多数の手紙
をまとめて本にし、エンパ
イヤブル(一〇三階)をも
じって一〇二の便りという
題の本にした。その表紙の
装丁を朝井にたのんだよう
だ。木葉を大きく散らし、
摩天廊と太陽をとぶ飛行機
をペン画で添えた彼にして
は洒落たものだが市長はあ
まり気に入らない由。一で
すが、今となってはいいも
のですよね」と館長は本を
指しながら救いの言葉をほ
さんでいた。

次に、牧野信一と信一を
とりまく巷(当市)の文学
芸術青年のこと。

毎日海岸に行つて、裸の
まま水着の少女像などを描
いていると、カンパスのそ
ばにきて、じっと見ている
子供づれの若夫婦がいた。
甘酒茶屋でひと休みして甘
酒をのんでいるときも、彼
等はまたそこへきた。しぜ
んに話しかけてくるうち、
彼が新進作家の牧野信一だ
とわかった。

『父を売る子』を私は読
んでいたの、すぐ親しく
なつてしまひ、新玉町の家
にも行くし、谷津の奥の彫
刻家牧雅雄の住いにもつれ
てゆかれた。そのアトリ
エは、北原白秋の残党と彫
刻家牧と小説家牧野の酒盛
りで、日暮れになるとひと
くせある酒呑達が、いつの
まにか集まってきた。上大
井村の瀬戸村長や古屋安定、
福田正夫、川崎長太郎、魚
会社専務の息子瀬戸一弥
影山公平、ペンキ屋の画乱

洞、隣りの桃源寺和尚、そ
れにアトリエの主人公と牧
野と私に加わつて、不思議
な酒宴となる。

屋間は、てれくさそうに
はにかんでいたり、苦虫を
かみつぶした風の牧野が急
に立ち上つて、ミヤコのセ
イホクを歌いだす。つづい
て若き血に燃ゆるから白雲
なびくに移り、北大の寮歌
のつぎに、都ぞヤヨイの花
くれぬの合唱になるころ
は、両手をひらひらさせて
踊りだしてしまふ。まったく
無邪気な酒盛りがくりか
えされ、私も彼等の仲間
に迎えられ小田原が好きにな
り、桃源寺の貸家ぐらしし
ながら貧乏がつづいた。

当時、小田原で酒の修業
をすれば、日本中どこへ行
てもひけをとらない一流だ
よと彼等はそう信じていた
らしい。思えばドロドロの
酒呑み達であった。牧野は
そのなかで酒を楽しむふり
をしながら苦悶していたに
ちがいない。

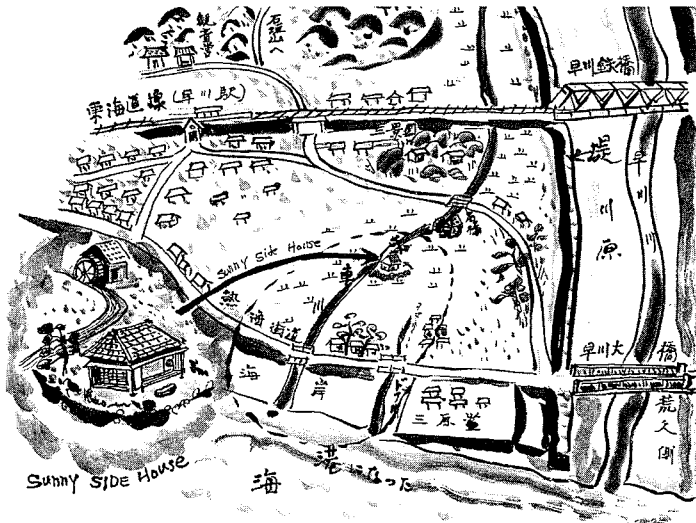
私は、小田原の街をある
きまわり、早川の近くで、
まるで夢のように住みよき
そんな空き家を発見した。
橋をわたつて、河原をすこ
し溯つてゆくときれいな小
川に沿つて水車がゆつくり
廻っている向う側に、ミカ
ン山と温室を背景にして、
小さな貸別荘があった。私

は、風呂場をアトリエ
にしたが、同じように製作
は、はかどらない。もちろ
ん、いつもの仲間ほかに、
新しく東京から岡崎の六ちゃ
んも姿をあらわし、谷津の
酒盛り場が早川に移つてき
たし、気のむくままに双方
の家を往き来した。

牧野は、板きれに「SU
NNY SIDE HOUSE」と書いて標札をつく
た。「サンニー・サイド・
ハウス」という題名の作品
(全集第一巻三四四頁)が
あるそうだが、もちろん小
説とこの早川の家とは別個
のものであろうし、彼の小説
の幻想的で白日夢のよう
な雰囲気どころか、魚料理
のとくいな影山や酒盛りの
好きな瀬戸などが腕をふる
うので、酒樽が空になるま
でドロドロの酒呑み達が腰
をすえてしまった。

ある日、いっしょに行つ

早川村車川周辺図



隠岐威重描

てくれよ…と牧野が私を誘
いにきたことがあった。た
しか、辻堂あたりの中村武
羅夫邸に同行したら、すぐ
に現金をわたしてもらえた。
それは「新進作家叢書」の
印税手形の割引を頼みにいっ
たのだ。…君はな、ゆっく
り口をきくから、分別あり
げに見えて、こういうとき
具合がいいんだよ…と牧野
はニヤリとした。
「行くとき、急に折り目の

た。そのスキに魔がさして
しまった。あのとき私さへ、
いっしょについていれば、
あんなことにはならなかつ
た。
そうつぶやいて瀬戸はう
なだれるばかりであった。
そういうば牧野は、いつ
ごろであったか、先輩であ
る彫刻家牧雅雄さんのアト
リエへモデルにながく通っ
ていた。あの胸像は、どこ
にあるのかな…。
瀬戸君に牧さんもいまは
もうみないなくなつてし
まった。結局私は、牧野の
文学的方面にくらいが、長
く酒のみ合ったころがな
つかしい。

好みで建てたような家だつ
た。
信一が死んだあと、その
家を老人の二つ年上の友人、
画家の卵の倉馬蔵がアトリ
エに借りていた。老人はよ
くその家を訪れ、画技の指
導を倉から受けた。
戦争が終って、老人が満
州から引揚げ、当地で教職
についた時にもその家は昔
のままにあった。当時四中
(現城南中)に務めていた
S女史が母親と一緒に住ん
でいた。その頃も何回とな
くその家を訪ずれたが、港
が出来ると田浦と一緒に海
の中に沈んでしまった。

さんがいたのだ。屋根がと
がって、囲りをペンキで塗っ
た家な。加藤さんが今の所
に越した後に竹下っていう
人が来たんだ。そうそう、
昔新宿のムーランルージュ
で竹下千恵子っていう女優
がいたな、スラッとした美
人だった。その女優の兄さ
んが病弱でそこで療養して
いたんだ。
そう言われれば、老人に
もそんな記憶がかすかにあ
る。大がらな当時の田舎に
ないハデな美人がいたよう
におぼえている。

英二氏の文にあるように、
閑右衛門は夏になると御幸
ヶ浜に画架をたて、よく若
者の人物像を描いていた。
その絵を秋の文展に出し
て、そして毎年落選してい
た。恒例になっていた。周
囲も、またかと思っていた。
昭和の初当、世は不景気
のまっただ中にいた。昭和
六年には満州事変が北の国
で不穩の雲をたちこめ出し
た。だが、まだ大正デモク
ラシーの余勢は続き、少し
廃退の気風の中にまだ明る
い自由を謳歌していた。
その頃どうゆう風の吹廻
しか、スポーツ熱が大衆の
中に満ぎりだした。
野球・テニス・陸上競技
等々、まれにはラグビーと、
まだゴルフは高嶺の花だっ

たが。そのスポーツも、自分自身で楽しむスポーツ本来の好ましい姿で流行していった。

小学生も、中学生も、地区の青年団も、町役場の吏員も、電力会社の、銀行の社員も夫々のチームを作り、草試合をくり上げ、楽しんでいった。

お医者様まで野球チームを作り優雅な、おっとりした球さばきをしていた。プロチームはなかった。大学生がその頂点にいた。

六大学リーグ戦をラジオ屋の前に人垣を作って聞いた。KOの宮武・山下・Wのダテ、イタミ、Mの某にと盛んに声援を送った。

この町でも、医者、歯科医の息子、料理屋、待合、魚問屋の息子、金にゆとりのある家庭、土地の中学を出て東京に遊学している連中が野球チームを作り、その名をワイルド・ギーツという洒落た名を冠し、はち切れる若い力が、どこか田舎臭い他チームを押し町の人気の頂点にいた。女学生が、色街の芸伎が黄色い声援を行っていた。

夏休みに入ると、その連中は御幸ヶ浜に繰り出て、ビーチパラソルの内で外で、渚のくだける波の中で、沖の青き水の中で、海水にぬれた若い皮膚の上にキラキ

ラ真夏の光を反射させていた。

その若き群れの雌蕊の部には、毎年避暑に来る東京の明るい跳返り娘、大会社の役員、隠居した吏員、軍人の娘、中には貴族院議員の孫娘という飛び切りの種までいた。

それをギースの連中が真黒に陽焼したハダで雄芯として取りまいていた。きわだった存在だった。晴れた日はもちろん、少しぐらいいの小雨の中でも、そのグループは陽気に眺めまわっていた。不思議なこと、色恋とかかのドロドロしたことは少しも起きなかった。

そんな若い姿、その雰囲気、画家の閑右衛門の創作欲を刺激したのだから。毎夏になるとそのグループの一、二名をモデルにしてきた。乞われる若者も画家のたのみを心よく受けていた。また今年も落選するのを明るく問いかけて、モデルになつていった。

老人はまだ中学の低学年の頃で、その男女の輪の中には入れず、外側から、その輪を、特に閑右衛門の太い筆で、パレットナイフで力強く画面を創り上げていく様を熱心に眺めていた。こんなこともあった。或る日、閑右衛門が画架を立

てている横にKという色白で鼻下にチョビ髭を蓄え、弟子を一人助手につれた画家が同じモデルで八号ぐらゐの小品を創り出していた。Kは二、三日で器用に絵をまとめ、出来上ると隣りの閑右衛門に黄色いカン高い声で話しかけていた。

老人(若者)も土地の中学をおえ、東京の学校に籍を置いた。その学校の友人に凶案家の息子がいて、上野の招待券をよく廻してくれた。帝展が文展に、国画会、一水会、独立、新制作派等々の新しい勢いが画壇に張出して来た。絵は好きだったので、それ等の展覧会にはよく行ったが、閑右衛門のことは忘れていた。

また閑右衛門は絵具の渦・沼の中で苦闘していた。絵も八分の出来というところだった。

老人(中学生)はその二人の絵を、創作態度を、熱い砂浜に一人坐り眺めていたが、チョビ髭氏の作品は小さくまとまっていたが、力強さを少しも感じなかった。閑氏のそれは力あふれていたが、中々出来上らぬのがもどしかった。

次の日チョビ髭氏が去って、閑氏はまだ一人で描いていた。驚いたことに、昨日までの画布は裏返され、百号のカンバスの裏地・裏側にまた新たに絵具が置きだされていた。

画架の後から見ると二人の男女が、赤白ダンダラの水球を淋しく眺める未完の姿があった。その年も、その絵は上野の壁にかからなかった。その次の年には閑右衛門の姿は浜にも、巷にもなかった。牧野信一の自殺(昭和十年)前後とおぼえている。

だが、彼の受賞のあとには次のトラブルがあった。入選し、上野の美術館の壁に飾られた作品に、搬入後彼は禁を犯し、無断で加筆したのだ。この加筆事件を新聞は、面白おかしく取上げ、追求し大事件にしたててい

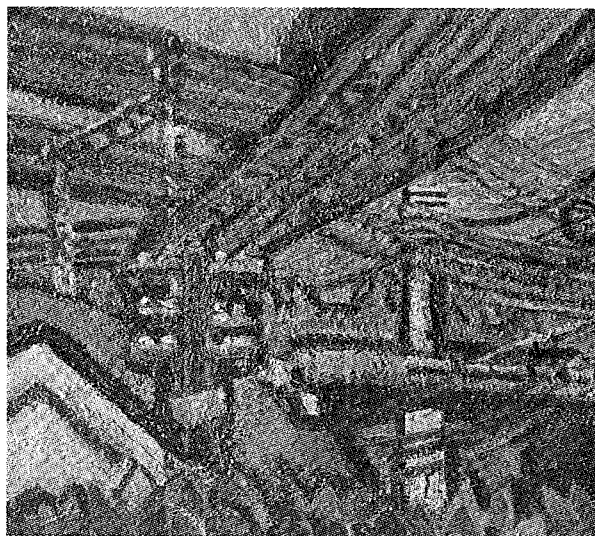
た。おかげで彼は、彼の作品は、大臣賞をのり越えて、別の意味で一躍有名になっていった。

でも幸に、その絵は大したトガメも受けず、取除かれもせず、上野の壁を飾っていた。

後に、老人(若者)も美術館でその絵を見た。天井にどときそうな大作、彼が茶褐色の暗い色でなく、案外明るい色でまとめてあった。ピカソが極く若い頃好んで描いたサーカスの人々のどこから淋しさをただよ

電線風景

朝井閑右衛門(54×54cm)



わす作品、そんなベリソスが彼の絵の底にあった。でも、モチーフとは別に、彼の力強さが画面にあふれていた。いい絵だと思った。そして問題になった加筆のケ所は画面の馬(?)の前方に垂れさがった大縄の部に加筆したとか、縄の明部をより強調するために白色を置いたとか聞いた。老人(当時若者)は苦笑した。彼ならそんなこと(加筆)は入選の前後を越えて、より作品を良くするために、ためらわず、するだろうと思った。

画壇で有力の地位を得ていっ
た。

老人側からしか彼を知ら
ぬが、十年も前から、子供
の時から本ものだと思っ
ていた人が有名に、いや、人
に認められたことは、
喜ばしいことだと思つた。

だが、時代は急転歩で戦
争にのめり込み、老人(若
者)も時代に合せて大陸に
行き、閑右衛門のこと、幼
少年の頃の懐かしい憶出も
小さくしぼんでいった。

戦後の引揚、生活の戦い
で絵どころではなかったが、
でもたまに書店でのぞく画
集の中で彼の重厚な画面を
見ると、やはり昔と違わぬ

鑄掛屋物語

— お袋の味と鑄掛鍋 —

星野幸一

今春(昭和六十三年)、小
田原簡易保険旅行会が主催
したバス旅行に参加した時
のことである。一泊二日の
能登路の旅で座席に隣り合
せたのは一面識もない八十
歳がらみの老人であった。

話を伺えば上多古の小田
急線ガードを潜ると直ぐ右
側で戦前ブリキ屋を営んで
いた永井さんという方であ
った。

大変元気な人で長い道中
の往復に苦労話や昔の思い
出を色々話されたが、特に
私の興味を誘ったのは鑄掛
師としての経験談を聞かさ
れたことである。

戦前はどの家庭でも鍋
と一緒で、極端な遅筆で一
枚の絵も数年がかりで創り
上げていたようだった。
ルオーが一枚の絵を、そ
れこそ、ぬったり、削すつ
たり、幾年も幾年も悪戦苦
闘して仕上げている姿が彼
の絵の中にもあった。
でも、ルオーの絵と、彼
の絵とは別の世界で、彼に
先と同じ厚さと材質のもの
を切つて焼き鑄掛けられて
いた。

「みじめさ」を感じること
はなかった。

明治の中頃まで私の家の
裏に老夫婦の鑄掛屋がいた
という話を聞いて居り、村
内には何軒かの鑄掛屋があ
った。

道具箱を天秤棒(鑄掛屋
のは普通の長さ(六尺)よ
り長くて七尺五寸あった)
で担ぎ、後には自転車、荷
台に積んで出先で註文をと
り鑄掛けて廻つたが仕事が
段々に減り昭和初期には
ブリキ屋の兼業となつたよ
うである。

話を伺っている内に永井
さんは鑄掛の秘伝のような
ことを話された。
鉛と錫の混合比も肝腎で

は別の強い主張があった。
すまぬがついめんどうで。
でも年次の少しの違いは
あろうが、記したことは事
実である。

不精になった老人は、朝
井のことは鎌倉の県の美術
館で調べれば正確なことが
分ると、内田四方蔵のアド
バイスもあったが、それも
せず、ただ、老人の過去の
わずかな記憶でこの文をま
とめてしまった。読者には
新樹会の第二・三回展に出

あるが、それは古釘等の鑄
びた鉄片を薬研できしらせ
て鑄(酸化鉄)を採り、細
かい篩にかけてビン等に貯
めておき、鑄掛の際、鉄粉
を膠で煉り下地に塗ると上
手に仕上るということであ
った。

鑄掛屋の姿が消えて久し
いが、江戸時代から明治、
大正、昭和前期にかけて鍋
底の孔を塞いできた鑄掛師
たちの伝統技術は常に陰の
存在となつてきた。

当時の台所は土間であり
長年燻で燻されてきたので
梁や天井、柱、羽目等は真
黒になっていた。採光、換
気状態は悪く電灯も四〇ワツ
ト位でうす暗かった。

「へっつい」で御飯を炊
き「七厘」に火種をとり、
火消壺の消炭を上へのせ炭
を起して御飯がつくられて
きた。

土地でとれた野菜や魚介
類が主材料となり冷蔵庫が
なかったので買置きするこ
とが多かった。

そうとして意にそわず、病
床にて毎年加筆し、それで
も不満ながら、やっと第四
回展に出した三、四年が
かりの作品の由。一九五〇年
十月号のアトリエ誌から。
(おき たけしげ)

この電線風景(B)も、
しをのせた。

ともなく鍋や釜が唯一の調
理器具であった。水は井戸
の釣瓶から汲上げていた。
こんな台所風景の中で母
親たちは手造りで食卓を飾
つたのである。そしてここ
からお袋の味が培われてきた。

当時は洋食と云えばライ
スカレーにトンカツ、ラン
チぐらいであり中華料理で
は支那そば(現在のラーメ
ン)にワンタンであった。

戦後は台所の近代化によ
りステンレス製の流し台三
点セットや電気冷蔵庫、調
理器具類も電化、ガス化が
普及し、最近ではシステム
キッチンの導入により戦前
の面影を一新してしまつた。

食生活も洋風化、インス
タント化、外食化が進み、
食卓のメニューは多彩を極
めている。

世は正にグルメの時代と
喧伝されているが、反面お
袋の味が影をひそめてしま
つた。
戦後生れの人たちが手造



古都鎌倉史跡めぐり(一)

下川茂三郎

昭和六十三年九月十一日(日)江の島電鉄藤沢駅前、強い秋雨の中八時三十分集合。

はじめに

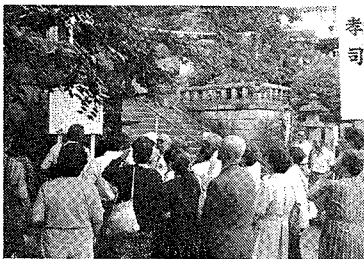
奈良・京都と共に我が国の代表的な観光文化都市と知られている鎌倉を訪ねる。

源頼朝がここに鎌倉幕府を開いたのは建久三年(二二六)で、以後室町・徳川と七百年も続く武家政権の発端となった。

鎌倉幕府は源頼朝から頼家・実朝の三代で源氏の正統はとだえたが、かわって外戚の北条氏が実権をにぎり、以後百五十年間政治・文化・経済の中心地となっていたが、元弘三年(一一三三)新田義貞の鎌倉攻めで幕を閉じるが、その後も関東管領足利公方家の居館がおかれ、室町末期・北条早雲の本拠小田原に繁栄が移るまで、関東地方における政治文化の中心地となっていた。鎌倉の文化は奈良・京都の貴族的な王朝文化と対照的に異り、質実剛健をむねとする武家文化といわれる。今も鎌倉と室町初期に建て



電ノ口刑場跡にて



孝司

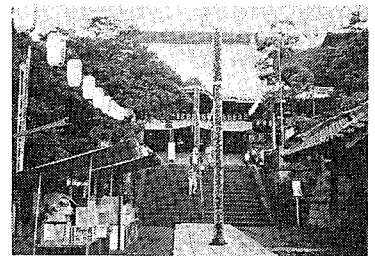
電ノ口寺にて

電の走る通りを横断。

一、電ノ口刑場跡
竜口寺山門左脇に日蓮上人法難の地として有名な鎌倉時代の刑場跡がある。

建長五年(一一三三)鎌倉に入った日蓮は、庶民の救済に強い情熱をもち、辻説法を行い法華経の弘道に努力し、正嘉元年(一一三三)には「立正安国論」を時の執権北条時頼に送り、更に既成宗派を激しく攻撃、その禁制を幕府に強請するなど強い主張を示した。

このため反感を買ひ、ざん訴にあつて捕えられ、「悪口の科重犯」の罪で文永八年(一一三三)九月十日、子丑の刻(十二日午前時)敷皮石の断頭場に据えられた。死刑執行役人依智の三郎が蛇胴丸を振り上げた時、烈風強雨・天地震動し江の島の方から満月の様な光り物が飛び来りて眼がくらみ、



電ノ口寺

どうと倒れて首を斬ることが出来なかつたと伝えられる。幕府殿中も、物の怪に遭つて騒動し、日蓮は死罪一等を減じられ佐渡に配流となった。

なお、建治元年(一一三三)九月七日、元の使者杜世忠ら五人が、文和二年(一一三三)五月二十日、北条時行、長崎河四郎、工藤二郎らもこの地で処刑された。

又、応永二十四年(一一五七)閏五月十三日、上杉禪秀の鯉岩松入道天用が謀反を起し捕えられ梟首された。

電ノ口刑場跡碑や五輪の宝塔、日蓮御一泊の靈窟などがある。

富田副会長から刑場跡や竜口寺など由緒の説明を聞く。

二、竜口寺
片瀬山の南腹に建つ彫刻の美しい山門をくぐり、急な石段を登る。

開基は日法上人で延元二年(一一三三)、宗祖日蓮が生涯で最大の法難を靈験によつてまぬがれたという、霊地跡に一草庵を営み、自ら日蓮上人像を刻して安置したのが寺の始まり。

慶長六年加藤清正の篤信で大本堂が発願され、寺域約一万六千平方メートル、現大堂は文政元年(一一八八)の再建で間口十六間・奥行十八間敷皮堂とも称す。堂内に日蓮聖人像・六老僧・清正公像など安置。

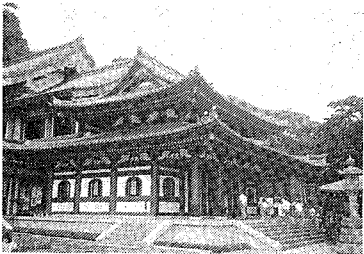
大堂背後に明治四十三年竹中藤右衛門が建て、仏祖三宝尊を安置した奥唯一の五重の塔がそびえ立ち、その左岡に昭和四十五年法難七百年事業として、日本山妙法寺から寄進された白亜の仏舍利塔がある。

大書院は長野県長野市松代から移築した、松代御殿で昭和八年の完成。

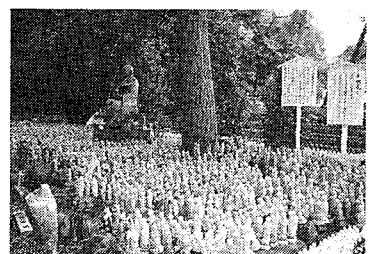
中山法華寺より移した延寿の鐘樓堂・妙見堂・七面堂・浄行堂などがある。

毎年九月十一日から十三日には、日蓮法難記念法会が全国から信者を集めて盛大に開催され、ぼたもち供養も行なわれる。今朝も夜店の地割や出店の準備で賑わっている。

前庭眼下に片瀬海岸や江の島の眺めがよい。
江の島駅から長谷駅下車。



長谷寺



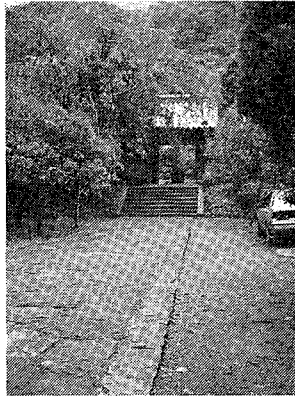
長谷寺千体地藏

三、長谷寺
坂東三十三カ所霊場の第四番札所で俗に長谷観音と呼ばれている。開山は徳道、開基は藤原房前で天平八年(七三六)の創建と伝え、海光山茲照院と号す。

駅から五分土産物屋や料理屋の並ぶ参道を抜けて、大型駐車場、山門をくぐると左手拝観料受付所。右手庭池の庭園左に弘法大師自刻の出世開運を授け



長谷寺十一面観音



光則寺参道

大黒天堂、堂脇から曲りくねった石段を登る両側に何千体かの水子供養像が見事に祀り供えられている地蔵堂から、右手に文永元年(三三三)物部季重寿造梵鐘(宝物館)に変わり、昭和五十九年製を吊す鐘楼。源頼朝四十二歳の厄除のため祀った厄除阿弥陀如来坐像(三・八米)を祀る阿弥陀堂。

十六年後の天平十八年三浦の長井の浜に漂着し、寺を建てお祀りしたのが起原と云う。寺域は約四万平方米、観音堂南側に昭和四十二年十月完成の見晴舞台からは東方眼下に、鎌倉市街や由比ヶ浜・葉山・三浦半島の眺めが一望で美しい。

の名を山号に自分の名を寺名にしたという。山門・本堂・庫裏など山周樹林に囲まれ、堂内に日蓮・日朗・大梅院尼像・伝日郎入牢七人衆像など安置する。山門前で和田理事の説明で引返し次へ。

衆生済度の誓願を成就し現世利益を授け下さる、十一面観音立像は偉大で見事な本尊で、九・一八米の金箔像右手に錫杖を持ち左手に蓮華をさした花瓶を持つ独特なお姿は壯観で効験さを調和させて美しく、わが国一番目の大きい木像で、寺伝によれば養老五年(三二二)徳道上人が大和の初瀬で作った一木二体の像で、一体を大和長谷寺に祀り他の一体を、縁のある地に行つて民衆を救ってくださるよう祈つて海に流した。これが

長谷観音の北隣で参道の長い日蓮宗の寺、号は行時山、開基は北条時頼の近臣宿左衛門尉光則の居宅跡。日蓮の「立正安国論」は光則の手を経て時頼に渡された。竜ノ口法難で捕えられた日朗ら日蓮の門弟は、光則に預けられ土牢に幽閉、光則はこの間に日蓮宗に帰依し、邸を寺に改め父行時

の東にある。社伝によれば神亀年間(七〇六)頃、染屋太郎時忠の創建というが、勧請年代は不明で、鎌倉時代には伊勢別宮で、頼朝を初め政子、実朝らの参詣がたびたびあった。祭神は天照大神で、明治二十年長谷寺の鎮守五社明神社を合祀した。社の門前に頼朝七騎落の安藤藤九郎盛長の屋敷があった。頼朝と参詣の都度立寄ったという。

衆生済度の誓願を成就し現世利益を授け下さる、十一面観音立像は偉大で見事な本尊で、九・一八米の金箔像右手に錫杖を持ち左手に蓮華をさした花瓶を持つ独特なお姿は壯観で効験さを調和させて美しく、わが国一番目の大きい木像で、寺伝によれば養老五年(三二二)徳道上人が大和の初瀬で作った一木二体の像で、一体を大和長谷寺に祀り他の一体を、縁のある地に行つて民衆を救ってくださるよう祈つて海に流した。これが

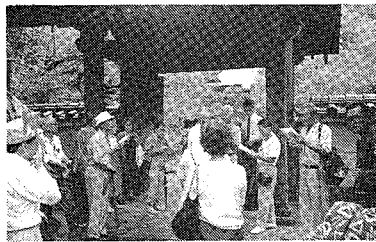
十六年後の天平十八年三浦の長井の浜に漂着し、寺を建てお祀りしたのが起原と云う。寺域は約四万平方米、観音堂南側に昭和四十二年十月完成の見晴舞台からは東方眼下に、鎌倉市街や由比ヶ浜・葉山・三浦半島の眺めが一望で美しい。

の名を山号に自分の名を寺名にしたという。山門・本堂・庫裏など山周樹林に囲まれ、堂内に日蓮・日朗・大梅院尼像・伝日郎入牢七人衆像など安置する。山門前で和田理事の説明で引返し次へ。

衆生済度の誓願を成就し現世利益を授け下さる、十一面観音立像は偉大で見事な本尊で、九・一八米の金箔像右手に錫杖を持ち左手に蓮華をさした花瓶を持つ独特なお姿は壯観で効験さを調和させて美しく、わが国一番目の大きい木像で、寺伝によれば養老五年(三二二)徳道上人が大和の初瀬で作った一木二体の像で、一体を大和長谷寺に祀り他の一体を、縁のある地に行つて民衆を救ってくださるよう祈つて海に流した。これが

十六年後の天平十八年三浦の長井の浜に漂着し、寺を建てお祀りしたのが起原と云う。寺域は約四万平方米、観音堂南側に昭和四十二年十月完成の見晴舞台からは東方眼下に、鎌倉市街や由比ヶ浜・葉山・三浦半島の眺めが一望で美しい。

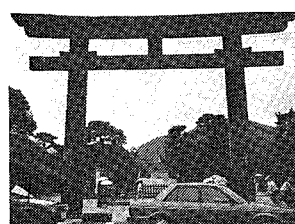
の名を山号に自分の名を寺名にしたという。山門・本堂・庫裏など山周樹林に囲まれ、堂内に日蓮・日朗・大梅院尼像・伝日郎入牢七人衆像など安置する。山門前で和田理事の説明で引返し次へ。



光則寺にて



二ノ鳥居



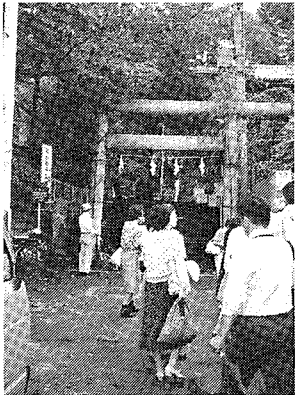
三ノ鳥居

(続く)

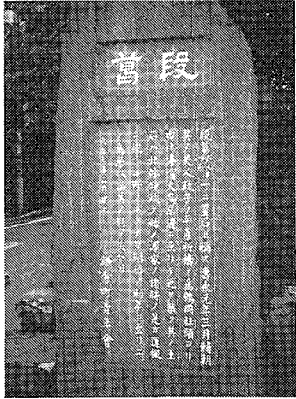
六、若宮大路 鶴岡八幡宮の社頭三ノ鳥居から南へ一直線に由比ヶ浜までは約二杆の参道を、寿永元年(二二八)源頼朝が、妻政子の安産祈願のため造ったもの。工事は北条時政が参加、頼朝自身が指図したという。国の史跡指定になっている。

道路は中央部に土石を盛り一段高く、段高とも称されている。昔は由比ヶ浜に近い一ノ鳥居から三ノ鳥居まで続いてしたが、明治初年一ノ鳥居と二ノ鳥居の間を取りこわされ、今は鎌倉駅近くに立つ朱塗りの二ノ鳥居から三ノ鳥居の間のみとなっている。社前に近づくとつれ道巾が狭くなっているのは、参拝者の目にこの参道が長く続いて奥ゆかしいという印象を与えるためだといわれている。

二ノ鳥居東側の鎌倉影会館の横奥一帯は宇都宮幕府があった所で、嘉禄元年(一二三三)大蔵の地よりこの地に移された。跡地に記念碑がある。これに北接して第三次の若宮大路幕府は嘉禄二(一二三三)年に開設され、元弘三年(一二三三)の新田義貞の鎌倉攻めまで続いた。跡地の記念碑は、雪の下郵便局の横を入った所にある。三ノ鳥居手前左側の峰本そば屋は、相沢会長同業のよしみのお店、昼食は特別の御配慮を頂いた美味美食御料理に感謝満腹。食後の休憩を利用して岡部副会長より、次の鶴岡八幡宮の由緒の説明を聞く。



甘繩神明社



段高記念碑

西相模の石造物(9)

頭上に蛇の庚申塔



今年(巳年)に当るので、(いは六十年)に一回めぐり蛇を頭上に載せる青面金剛像の庚申塔をとりあげてみた。

写真は山北町向原小字村雨にあるもので、宝暦五年(一七五五)に建立されている。似通ったものが、同じく山北町皆瀬川小字高杉にあるが、これは明和五年(一七六六)のものである。

庚申は本来、六十日(あ

落穂集

◎今年(巳年)、巳は蛇に通じます。十二支のうち巳だけが象形文字で、蛇のくねり曲った姿を形どったものだし、蛇は人に嫌われ、絵でも写真でも様になりませんので、本号のページにどのような題材を選ぶか、編集委員再三鳩首の結果「北条氏の三鱗紋」ということに決りました。

◎保存用に綴り穴を設けたらという意見を多く聞きましたので本号から設けることにしました。

◎ページ数と原稿の関係から、本号は以前の組み方と同じページが多くなりまし

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
小田原銀座 アオキ画廊
足柄香粧株式会社
飛鳥屋
紳士服の **アメリカヤ**
画材 ガクブチ **ゆうえ**
伊勢治書店
かまぼこ
株式会社 **江島市場**
株式会社 **小田原ガス**
小田原信用金庫
小田原報徳自動車
株式会社 **オートセンター・スギヤマ**
株式会社 **小田原中央青果**
かまぼこ **籠清苑**
鐘紡株式会社 **小田原工場**
力本ボウ化粧品鴨宮工場
興電社
清水甘納豆
正栄堂

鈴木 廣木まほこ
辰寿堂スポーツ
大営不動産
割烹 おるほ
茶半家具株式会社
ちんぎょう本店
角田ガクブチ店
株式会社 **東華軒**
八小堂書店
八子マサ店
平井書場
富士写真フィルム株式会社 **小田原工場**
株式会社 **報徳屋**
株式会社 **松坂**
学生専科 **カマルク**
食器の店 **マルサンストア**
株式会社 **美濃屋吉兵衛商店**
スーパーマーケット **ワオワ**
山口菓子舗
湯浅電池株式会社 **小田原工場**

の観光協会でパンフレットを求めたら有料で金二百円を支払った、とはAさんの談。「流石、観光都市のことはある」とAさんは妙な感心をしていました。

◎前号の「郷土の地名」で石井富之助氏と書いた苦悩のにどうしたのか氏の敬称が抜けてしまった。お詫びする次第です。ところで氏を呼ばなければならぬ、先生と呼べば固苦しい、といった内容を石井氏が『図書館一代』に書かれていたと思いますが、その伝で、敬愛をこめて石井さんと呼ばせて頂くとして――

石井さん、いま般若心経の浄書を日課。一日一枚既に百枚に達しようとしているが目標は千枚とのこと。素晴らしい書体と伸びやかな筆勢を見れば、楽々と千枚を越すことは請合。

◎昨年はビールのドライ競争でA社に凱歌があがったそうですが、明治二十年代初め小田原でビールが製造されていた。名づけて下さい。「坂」「富士ビール」「大津村板橋内野氏ビール醸造を営むこと数年、販路未だ広からずといえども豊味の評あるを以てその盛名けだし遠きにあらざるべし」(『函東会報告誌』)

◎先日個人で鎌倉の史蹟めぐりをされる際、

◎次号は三月に発行の予定です。(陶生)